

● 史學研究會

例會 二月七日午後一時半より樂友會館講演室にて開會、左記の講演あり。

古人類に就いて

金關 丈夫君

ピカレントロブス、エレクトスを始め最近發見にかゝるシナントロブス、ベキニソシス等古人類の發達を實物模型及寫眞等により興味深く説明せらる。

熊澤蕃山の學說に於ける日本的要素

高橋 俊乘君

儒者の支那崇拜は自然の傾向であるが彼等が日本人であるかぎりまた日本を忘れることは出来なかつた。蕃山に於ては特にこの日本の傾向強くその著書はすでに和文を用ひ水土の美によりて日本の價值を説明し早く王政復古風の考へありしもその古代に對する憧れは單なる趣味に非ずして彼の本領たる政治經濟の改善に資せんとせし

ものである。

● 京都市帝國大學文學部史學科滿鮮旅行記(中)

十月十五日

午前七時安東着。往きと違つて税關の検査あるも、一行は全部無事通過。

午後二時十九分平壤着。平壤中學校長島飼氏の案内で大同江沿ひの平南線に移乘し、眞池洞驛にて下車、約十八町を徒歩にて雙楹塚及大墓の見學に赴く。共に高勾麗時代古墳の代表たるべきものである。一行は盜掘に依り毀られた跡を修理利用した入口より入り、反射鏡を應用して比較的内部を明るくし、研究に便するを得た。時間僅少の爲め記念撮影などをし早々に引上げた。與へられたる紙面の残り少き爲め記事簡略に失するも、詳細は朝鮮史講座「朝鮮美術史」を御閱讀下さらば、自分が駄文を弄する要も無いと思ふ。

本日の見學は此れで終り、夕刻平壤の旅館に着く。十月十六日

早朝より平壤博物館の見學に赴く。同博物館は實は獨

立の建築物でなく、圖書館の第三階に間借をしてゐるが、而も其の藏する所は學界の至寶たるべき貴重なものが多い。主任平賀氏の説明を煩はし一通り理解の上、更に各自、自由に研究する。次に其の中に就いて特に代表的な物若干を擧げると、

1、木棺。材質は檜の木と言はれる。外部に布を張り、更に其の上に漆を塗つてあつた爲に、よく保存され、形狀頗る完全である。傍に此の木棺を藏してゐた木槨の模型が在つて理解を助ける。該棺は樂浪郡時代の物で、世界最古の木棺と稱せられる。

2、戈。出陳秦戈は援の長さ五寸一分、胡の長さ四寸三分五厘、内の長さ三寸あり、鉛黑色を帯び、手工精巧鋒刃銳利にして、猶ほ實戰に用る得べしといふも過言でない。又本品の銘は背面に、「廿五年上郡守廟造高奴工師造丞申工新社」と陰刻されてゐる。而して上郡は秦代に始めて置かれたもの故、年號を冠せざる二十五年も漢以前にて秦の始皇帝の二十五年なるは疑はれずと。而して其の推斷にして謬りなくば、實に本銘

は金石文として最古の物である。

3、漆器。樂浪古墳出土品中の最大驚異とすべきものは漆器であるといはれる。本館にも其の幾種かを藏してゐる。

4、綠釉赤質陶器。胎質帶黃褐色で表面に綠色の釉藥を施してある。此れ又最古の釉藥に屬して貴重なものである。

5、細線鋸齒紋鏡。内行花紋鏡、方角規矩鏡、神獸鏡の多き中に、一面丈本鏡を見出した。

8、孝文廟銅鍾。環座の側に三行の刻銘がある。即ち、孝文廟銅鐘容十升。重卅斤。永光三年六月造。此の銘に依り、武帝の朝鮮を征するや、樂浪郡を置き、特に漢室の尊嚴を邊境に確立せんが爲め高祖廟と共に孝文廟を創建せし事を祭せられる點に意義の大なるものがある。

而して本鐘は其の廟に用ひた祭器である。

其の他多くの陳列品を列擧するの煩に堪へぬから此の程度に止める。一時間半の後本館を辭し自動車にて樂浪の

古墳見學に向ふ。

樂浪古墳は大同江、南串、龍淵の三面十四箇里に亙り丘陵又は耕地の間に千數百基散在する。一行の見學したのは大同江面石巖里の木榔墳及塼榔墳の二基である。

木榔墳。挿畫なしに叙述しても徒に文を冗長ならしめるばかりであるから、構造等は一切省略する。木榔墳内の木榔は實に二千年も完全に保有されてゐたのであるが、此の木榔墳の周圍は極めて堅密なる粘土で、雨水の浸透したものは自ら榔内に溜り、木棺は其の水中に在つて保存を全うし得たのである。本墳は大正十四年の發掘で、其の際多くの副葬品を出したが、殊に注目さるべきものは、直徑八寸、高さ五寸の漆器の鏡奩で、其の手工に於て驚嘆すべきものありと。次に羽觶二箇である。其の一に「建武二十八年蜀郡西工造」の銘があり、他の一には「建武二十一年廣漢郡工官造」の銘があつた事に依り、此の羽觶の製作年代を知り、且つ此の古墳が千八百年より古からざる事を知る。木棺の内部から裝身具と共に出た物に、遺骸に附けた腐朽せざる木印があり、其れに刻

されたる「五官掾王吁」なる文字は即ち此の古墳の主の身分及名を明にするものである。現在墳壟の高さ凡そ十一尺、底部直徑凡そ三十尺である。

塼榔墳。木榔の隣にある。(見學は最初本墳に、次に木榔墳に試みたのである)。大正十四年木榔墳發掘に際既に盜掘に罹つた空虚の塼榔が完全に形體を遺存せるを發見し、保護修理を施して觀覽に便してある。盜掘の際東方の側室に穿つた穴隙が今の入口で、其れを入ると、前室である。立室への入口は羨道と大差なく幅二尺八寸、高さ三尺で双壁の厚みは二尺五寸。閉塞せる塼の一部が除かれて辛うじて立室に入る事が出来る。立室に木棺の底材と思はるゝ厚板が残つてゐる。墳壟は大體楕圓形で、現在南北六十尺、東西三十尺、高さ二十一尺である。

兩古墳に袂別して次に樂浪郡治址に車を停める。島の中の小丘の上に木札があつて、此處は樂浦郡時代の城壁の西南隅に當ると説明してある。土城の廣さは大同江左岸に沿ひ、東北約六町半、南北約五町半を有したもので

ある。再び車上の人となり、ドライブすること約三十分間の後半壤神社前で下車。此れより徒歩で牡丹臺、乙密臺、玄武門、箕子陵等を含む牡丹臺公園を見學して山を下り、お牧の茶屋、永明寺前に出で、更に下つて大同江の水邊にて舟に乗り流を下る。風景絶佳、舟中に喫する辨當亦頗る美である。右に練光亭を仰ぐ所で下船する。此の練光亭の一劃に七重石塔、及平壤鐘閣鐘がある。

此處より徒歩で妓生學校に行く。舞臺の設けある階上で生徒の劍舞、僧侶の舞に好奇の目を輝やかした一行は、次の内地語の鴨綠江節と三味の音に初めて寛いだ氣持で拍手喝采を贈つた。最後に小さな生徒の脂畫に感心しつゝ、本校を辭去した。一行はそれより電車で驛に急ぎ午後二時三十一分發上り列車に乗る。(未完)

編輯の都合により、原稿締切前日に改稿し、記事を半減し、且つ可及的字数を減少すべく力めたので、行文が不自然晦澁となつたが、恐しからず御諒察あらん事を。(谷口)

●讀史會

例會 昭和五年十二月十九日(金) 午後七時より京大

樂友會館第一號室にて開會。左の講演ありて午後九時半散會。

一、くす人に就て 文學博士 喜田 貞吉君

例會 昭和六年一月二十三日(金) 午後六時三十分より樂友會館第一號室にて開會。參會者三十一名。三回生の卒業論文梗概左の如く發表され、尙ほ先年末歸朝の三浦博士の講演ありたり。

一、室町幕府の統制意識に關する一研究

三回生 赤松 俊秀君

一、武士發生史の研究

三回生 池内 義資君

一、原始神道と呪術

三回生 鈴木 讓君

一、封建制度の成立に關する一考察

三回生 清水 三男君

一、廣東と澳門

文學博士 三浦 周行君

例會 二月十三日(金) 午後七時より樂友會館第一號室にて開會。來會者二十三名。卒業論文概要發表其の他

一、日本上代の醫術に於ける呪術的形態

三回生 金丸 二郎君

一、卒業論文作成の経過に就て

三回生 古住 芳彦君

(同君の卒業論文は、王朝前期の社會政策)

一、土一揆に對する一考察 三回生 森 義雄君

一、我國資本主義思想の發生に關する一考察

三回生 下園 盛治君

一、近世に於ける學問の新傾向

三回生 吉田 三郎君

一、近世大和川の水運 文學士 肥後 和男君

●西洋史讀書會

例會 十二月十二日午後六時半より樂友會館に開く。

來會者十八名。散會十時半。

Ehrenberg; Das Zeitalter der Fugger 佐藤 賢君

Il terzo vento di Soave 黒田 正利君

例會 昭和六年一月二十三日定刻定所に開く。來會者十八名。卒業論文の梗概の發表あつて散會十一時。

ポーランド第二分割に就いて 江坂長四郎君

コンスタンチン大帝による基督教公認以後約百四十年

に於ける埃及教會の民族的發達 水川 温二君

十字軍時代ベニスの東方發展に就いて 松枝 清重君

タキッスの羅馬史觀に就いて 織田昌太郎君

例會 一月三十日定刻定所に開く。來會者十七名。前

回と同じく梗概發表あつて散會十一時。

アウグスチンの國家思想 市川 文藏君

Allanに就いて 井上千代喜君

千九百十八年十一月九日 西山 勤二君

會 報

●寄贈交換圖書

人類學雜誌 四五の八、九 附録 四六の一一

東京人類學會

歴史地理 五六の六、五七の一、二 日本歴史地理學會

史學雜誌 四一の十二、四二の一二 史 學 會

言語と文學 四 臺北帝國大學國語國文學會

龍谷史壇 三の二 龍谷 大學

考古學雜誌 二〇の十二、廿一の二、二考 古學會

史 苑 五の三

立教大學史學會

顯真學報 二

顯真學苑

國學院雜誌 三七の二、三三

國學院大學

國 史 學 五

國 史 學 會

史跡と美術 二、三

史跡美術同致會

北方郷土 二の一

函師郷土研究會

經濟論叢 卅二の二、三三

經 濟 學 會

史 學 九の四

三田史學會

民俗學 二の十二、三の二、二

民 俗 學 會

史蹟名勝天然記念物 六の一

同保存協會

伊豫史壇 六五

伊豫史談會

刀劍研究 十七の二、二

南 人 社

史 淵 二

九大史學會

大谷學報 十二の一

大谷大學大谷學會

染色文様史の研究(明石染人著)

萬 里 閣

支那に於ける佛教と儒教道教(常盤大定著)

東 洋 文 庫

通報(Toung Pao Vol. 28)

Paul Pelliot

●會員動靜

●入 會

廣島市皆實町五三四

梅田育太郎氏

(右紹介 千代田謙氏)

Well Estate, Brookline, Mass. U. S. A.

賴 龍 樹氏

(右紹介 松野遼崇氏)

臺北市兒玉町二の四三

波多野丈夫氏

兵庫縣武庫郡御影町石屋

若林 修二氏

(右紹介 中村喜代三氏)

松本高等學校

玉川 治三氏

(右紹介 三喜田熊藏氏)

奈良縣畝傍中學校

田中 一三氏

(右紹介 寺尾宏二氏)

京都市左京區田中大堰町廿一、山上方

藤澤 吟治氏

●退 會

佐崎 重暉氏

●死 亡

藤井健次郎氏

足利衍述氏

右謹みて哀悼の意を表す。